

各界で、ユニークでエネルギッシュな人材が豊富と評判の一橋の女性たち、その活躍分野は多岐にわたっています。

彼女たちは、いかにキャリアを構築し、どのような人生ビジョンを抱いているのか？

HQでは、連載で一橋の女性たちをご紹介します。

第12回は、NHK手話ニュース845のキャスターであり、言語社会研究科の学生でもある木村晴美さんにご登場頂きました。

聞き手は言語社会研究科のイ・ヨンスク(李妍淑)です。

ろう者の教育環境を整える前提に、言語としての日本手話が社会的に正しく認知される必要があります

日本手話が禁じられることで ろう者の学力は低下していった

イ 木村さんは手話通訳者の養成というお仕事をしながら、現在、大学院2年生ですね。修士論文のテーマは、もう決められましたか。

木村 3年目で2年生、仕事があるからマイペースです(笑)。私は入学前から、ろう者の言語的抑圧などいくつかのテーマをもっていました。でも、いざ論文となると、どこに絞ろうか悩みました。ろうの子どもたちのフリースクール「龍の子学園」に関わっていますし、ろう教育への理解が社会的に広まっていないということもあり、ろう児の日本手話及び書記日本語の習得についてまとめたいと考えているところです。そのためには、日本手話が言語であることの科学的分析も必要。ろう教育が社会で誤解を受け、抑圧を受けている状況を改善するために、できることをしていきたいと思っています。

イ ろう教育のあり方について理解している人は、非常に少ないですね。まず、ろう者の教育環境について教えていただけますか。

木村 私がろう教育を受ける前のことから、お話ししたいと思います。私の両親はろう者で、父は日本手話のモノリンガル。日本語の読み書きは不得手です。両親が学んだ昭和20年代は、ろう者への理解も、日本手話が文法をもつ体系的言語であるという認識も全くない時代。手話は身振りやパントマイムと同じようなもので、最初に手話を学んでしまうと話せなくなると思い込まれていました。私が幼稚園に入学した当時も、口の形を読み

取る読話や発音の練習といった口話訓練が重視されていました。両親は先生に「日本語が話せなくなってしまうから、家のなかでは手話を使わないで」と言われました。ですから、両親は、私がいるところではできるだけ話さないようにしていました。私が目を向けると手話を止めてしまうんです。

イ 木村さんご自身は、どう思っていたのですか。

木村 子どものころは両親の手話は劣ったものと思い込んでいました。先生とのコミュニケーションには口話のみ使っていました。ろう学校では、口話教育に力をいれるあまり、教科の学習は後回しにされ、学力が犠牲にされます。例えば、「1つ50円のパナナが3個と1つ80円のリンゴが2つでいくらかですか」という問題があったとします。その問題文を声に出して読むのですが、発音が悪いとかで結果的に発音の指導を受けてしまいます。すべての授業が口話訓練になってしまうんです。



木村晴美 (きむら・はるみ)

日本社会事業大学卒。

国立身体障害者リハビリテーションセンター学院手話通訳学科教官。
NHK手話ニュースキャスター。現在、言語社会研究科第一部門修士課程在学中。
著書に「はじめての手話」。

論文「ろう文化宣言—言語的少数者としてのろう者—」
(現代思想、1995年)は、アカデミズムにも影響を与える。
ろう者の視点、ダイエットやおいしいもの話等を綴ったブログも人気。

イ そういう環境のなかで、木村さんを成長させたものは何だったのでしょうか。

木村 私が幸運だったのは、母が自分の経験から、口話訓練より読み書き、本を読むことが重要だと認識していたことだと思います。私は手話を理解していましたから、手話の助けを借りて本を読み、その知識を借りて、先生の口話を理解していました。日本語の語彙の知識がなければ発声できたとしても、先生の口の形は読み取れなかったと思います。ですから中学を卒業するまで、教室では先生と同級生の間で通訳のような役割をしていました。高校は普通高校に進学したのですが、口話は上手な方だったのにクラスメートとの会話では通じなかった。社会では、口話を通じないということが初めてわかりました。

ろう児にたずさわる教員が 日本手話を知らないという現実

イ 口話教育が重視されたのは、文部省(当時)の指導でしたね。

木村 明治11年にろう学校が設立されたときは、手話はろう教育でろう児の間で使われていましたが、第二次大戦後に状況は大きく変わり、口話が主流になりました。その背景として、1880年にミラノで開かれた「国際ろう教育会議」での口話優位の決議というものがあります。ミラノ会議は医学関係者が中心で、口話推進派のろう学校教師も少数参加していましたが、当事者であるろう者はまったく参加していません。

日本では昭和50年代に、同時法手話というものがある考えられました。これは日本語にあったサインをつけていくという人工的なものです。また、トータルコミュニケーションという考え方もあり、指文字や母音と指の形を組み合わせるキュードサインも推進されました。でも、キュードサインは学校によって異なりますし、基本は日本語ですから、システムの上でも中途半端になってしまいます。

イ 現在はどのようなのですか。日本手話はろう者の人びとの間で生まれ、広がった言語ですが、ろう学校では採用されていないのですか。

木村 少しずつ手話を導入する学校も出てきましたし、手話講習会に通う先生も出てきました。しかし、手話講習会で教えられるのは、自然言語としての日本手話ではなく、日本語対応手話です。したがって、日本手話のできるろう学校の先生はいないといってもよいくらいです。現在、デフリースクール籠の子学園以外に、日本手話と書記日本語のバイリンガル教育を行っているところは一校もありません。ろう学校ではコミュニケーション手段としての手話を取り入れていても、基本にすえているのは日本語の習得です。バイリンガルという言葉にも、手話は第一言語というろう者の側の捉え方との差異や温度差がある。ここを変え

たいと思っています。

イ 木村さんご自身の経験からも、日本手話を覚えることで、日本語の習得がよりスムーズになる。そのためにもバイリンガル教育が必要だとお考えですね。

木村 はい。あるデフファミリーの子どもの例ですが、小学3年の子がバイリンガル会話テストを受け、成人並の手話ができる上に、日本語の読み書きもキチンと

習得していることがわかりました。これも、両親が正しい知識をもっていたからです。ただ、聴者の親は、理解はしていても不安を感じているケースが多い。手話を第一言語にして、結果的に手話だけのモノリンガルになったら…と。でも、口話教育によってセミリンガルになるのは、もっと酷いことだと思います。

イ アイデンティティの意味でも、第一言語は人間にとって重要ですからね。木村さんが指摘されたように、ろう教育自体が中途半端では、どうしても学力は低くならざるを得ない。それを、学力が低いのはろうのせいと、ろう者自身に起因させるのは間違いですね。

木村 母語(手話)による教育を保障されていたら、学力の問題を克服できていたかもしれないろう児はたくさんいると思います。話すということを強いられて自傷行為をしたり暴力的になってしまった幼い子の事例もあります。この子が籠の子学園にきた当時は集団行動がとれないほどだったのですが、スタッフの辛抱強い努力もあって両親が口話を強いることの間違いに気づかれ、手話を習得することによってすっかり落ち着きました。いまでは将来は医師になると、はっきり目標をもっています。子どもにとっては精神的な落ち着きを得ること、自分がろう者であるということを認めてもらうことがとても重要なことだと思います。

イ 木村さんの提示された問題は、ろう者に限らず、人間本来の姿を考えさせられるテーマですね。日本手話と日本語対応手話の違いは、ある

意味明確だと思います。前者が言語であるのに対して、後者は日本語ができる人のための補助的なサインですから。

木村 日本手話を使っている立場からみると、日本語対応手話は



イ・ヨンスク(李妍淑)
言語社会研究科教授



時間的にも効率が悪いです。日本手話だと一言で終わるのに、日本語対応手話は日本語の単語を当てはめ、くっつけた形ですから2～3倍の時間と労力が要る。見る方にも労力がかかります（笑）。一方、日本手話では眉の上げ下げなど顔の部位も文法要素。それに

よって、疑問文や条件文など文法的意味をもたせることができます。

イ 木村さんは前に「褒め言葉のつもりで、『ろう者は表情が豊かですね』と言われることがある」と言われていましたが、顔の表情が文法的要素だということが理解されていないということですね。

木村 理解されている方は少ないです。ろう学校の先生も、日本語対応手話を覚えれば日本語ができると思っていますが、ろう者同士は非効率的システムである日本語対応手話を使うことはありません。

ろう者のための総合大学をつくり ろう者の教育者・研究者を養成したい

イ 木村さんはNHKの手話ニュースでも活躍されていますね。お仕事を通じて感じておられることもあるのではないですか。

木村 先日、長野でしたか、大雨で朝5時に避難勧告が出されたことが手話ニュースで放送されました。でも、ろう者にはその避難勧告が聞こえないんです。私個人としては、死ぬときはどこにいても死ぬと思っている（笑）。かといって、ろう者であるために何かに巻き込まれたり、危険がわからなくて犠牲になることはやはり問題だと思います。

もう一つ、日本人として残念に思うのは、コミュニケーション・ストラテジーが弱いという点です。言葉が通じないという経験が少ないためでしょうが、この人はろう者だから筆談でやろう、身振りでやろうと考える人は少ないんです。最近の日本は外国人が増えてきたので、そういう意味でストラテジーに長けた人が増えてきたとは思いますが。

イ でも、仕事としての手話通訳者は、まだ確立していませんね。

木村 日本では手話通訳の扱いはボランティアの範囲。つまり自治体が病院や学校などに派遣しているかたちです。欧米ではろう者が大学に進学した際、フルタイムの職員として採用されるため、職業としてめざす人が多いんです。日本では福祉としての手話通訳。ボランティアだから女性。賃金も低いままに止まっています。

イ 取り組むべきミッションはまだ多いです。なかでも木村さんがろう教育の改革を重視されていることはよくわかります。大学院へ進学されたのもそのためですか。

木村 ろう者は言語的マイノリティで、社会的立場も低い。大学を卒業していない人が多いですし、資格をもつ人も少ない。つまり権威が弱いんです。ですから、ろう者が何を言ったとしても社会に及ぼす影響力は微々たるものです。ろう者が発言力をもつためには、大学等で研究をし、発言していく必要があります。私が「ろう文化宣言」を出したとき、先に大学院生になったろう者の先輩から、「アカデミックなところでもっともっと発信していったほうがいい」と言われました。このことが、大学院入学を決めた一つのキッカケでした。もう一つは、「Dプロ」というグループをつくって、ろう者がろう者として自然に生きていける社会をつくろうという活動をしていたとき、イ先生の講演を聞いたことです。先生が話された言語的抑圧とかマイノリティに対する抑圧は、ろう者にも言えるのではないかと思った。イ先生がいらっしゃる大学ということで一橋大学を選びました。

イ 光栄です。私も木村さんの「宣言」を読んで、敬意を払っていました。Dプロや「ろう文化宣言」は、日本のアカデミズムにも影響を与えています。マイノリティ問題の研究者でも、木村さんの発言で初めて気づかされたことが多々ありました。木村さんご自身は、入学されて、どう感じておられますか。

木村 勉強は大変です（笑）。私はろう文化やろう教育についてはよく知っていますが、ゼミの学生が自分の専門以外のことも幅広く知っているのに驚き、自分もそうなりたいと思いました。入学前より、ろう教育に対しても視野が広がったように感じました。また、日本語教育部門の学生たちが主体的に手話の勉強を始めたいといってくれましたし、龍の子学園のスタッフとの交流も始まりました。一橋大学の学生がろう者につながりをもてるようになったことも良かったと思います。

イ 最後に、今後の夢を聞かせてください。

木村 アメリカのギャローデッド大学のようなろう者のための総合大学ができるといいなと思っています。この大学は100年以上の歴史があり、卒業したろう者が全米各地のろう学校で教えています。日本にはまだろう学校専攻科までしかありませんし、ろう学校の教員免許が取得できる大学も全国で10校程度。カリキュラムのなかにろう者に対する知識や学問はまったくない状況です。私がこうして勉強をすることによって、若いろう者が大学に入る、あるいは教員免許を取る、社会人になって改めて大学に入る、といったきっかけになることを願っています。

対談を終えて

1995年に木村さんたちが発表された「ろう文化宣言」は、日本のアカデミズムに新鮮な衝撃を与えました。それは、聴者がろう者をまったく理解してこなかった現実を突きつけました。ひとつの言語は文化を形成する核となります。手話が自立した言語で

あることは、言語学ではいま常識になっています。こう考えると「ろう文化宣言」は、すこぶる自然な主張だということがわかります。いまでは少しずつ手話の存在が認知されてきていますが、まだまだ十分ではありません。

マイノリティがごく当たり前のことを主張しても、「過激」な発言に思われることがよくあります。事実、

ある人々にとって、木村さんは「過激分子」として恐れられていることもあるようです。しかし、ひとたび木村さんにとって話してみると、男女を問わず、彼女のおちゃめな魅力に惹かれない人はいないでしょう。木村さんは凜とした信念をもちながら、広い視野と旺盛な好奇心をおもちです。木村さんのこれからの活躍をますます楽しみにしています。（イ・ヨンスク）